

【(3) 言葉遣いや態度】

②「聞き取りやすい声の大きさや速さで話している」

【(5) 発問や指示・説明】

①「分かりやすい言葉を使い、簡潔に話している」

《つまずきの背景》

A 刺激の影響の受けやすさ、B 言語理解の困難さ、C 記憶力の弱さ、H 刺激の選択の困難さ、N 注意の持続の困難さ、O 見通しを持つことの困難さ、Q 状況理解の困難さ

《解説》

教師は、教室全体に聞こえるような声の大きさやゆったりとした話し方、間の取り方などに留意して授業を行う必要があります。また、日本語の特性を考えると、語尾を省略するような話し方は厳禁です。発問については、長くなると子どもは分からなくなります。逆に短すぎて後から付け加えると混乱してしまいます。一文一動詞で話すことを心掛ける必要があります。

学級の中にいる、刺激の影響を受けやすい子どもや、注意の持続、言語理解、記憶力などに困難さのある子どもに対しては、「短い言葉で伝える（記憶できる長さへの配慮）」「意味の分かる具体的な言葉で伝える（子どもの理解面への配慮）」「ゆっくり伝える（聞いたことを理解する速度への配慮）」などの配慮をすることで、指示が伝わりやすくなります。加えて、視覚的情報を提示することで、より理解は深まります。

主要発問についてはしっかりと考えた上で授業に臨むことが、様々な困難さのある子どもにとっては有効な支援につながります。

【工夫点】

- ・全体を見渡し、声の大きさ、速さを考えながら話す。（小中高）
- ・語尾まではっきり話す。（小中高）
- ・間の取り方に気を付ける。（小中高）
- ・声を調整して重要なところに気付かせる。（小中高）
- ・丁寧な言葉遣いを心掛ける。（小中高）
- ・簡潔で具体的な指示を一つずつ出す（1指示1行動を意識する）。（小中高 工夫例18）
- ・言い直さなくても分かるように端的明瞭な言葉を選ぶようにする。（小中高）
- ・重要なポイントを繰り返し強調する。（小中高）

◆工夫例18 「簡潔で具体的な指示を一つずつ出す（1指示1行動を意識する）」



《小・中・高等学校》

「〇〇をした後、□□をします。」のように教師が、複数の指示を同時にしてしまうことがあります。その場合、子どもが、「何と言ったの」と言ったり、「もう一度言ってください」と聞き返したりすることがあります。また、〇〇をしないで□□をしたり、〇〇をただで□□をしなかったりなどの行動をとるなど、うまく指示が伝わらないことが出てきます。教師が、1指示1行動を意識することで、それらを防ぐことができます。